

(様式第1号)

平成30年度 第2回 芦屋市男女共同参画推進審議会 会議要旨

日 時	平成31年2月27日(水) 10:00～11:30
場 所	男女共同参画センター 大会議室1
出 席 者	会 長 柳屋 孝安 副会長 中里 英樹 委 員 高田 昌代、宮本 由紀子、奥田 兼三、 寺田 彩喜子、村上 由起 欠席委員 武本 夕香子、中山 克彦、藤井 順子(敬称略)
事 務 局	市民生活部 森田部長 男女共同参画推進課 福島課長、長岡主幹、前川係長、 林主査、松丸課員
会議の公開	■ 公 開
傍聴者数	0 人

1 会議次第

(1) あいさつ

(2) 議事：第4次芦屋市男女共同参画行動計画ウィザス・プラン(第2次女性活躍推進計画を含む。)及び第2次芦屋市配偶者等からの暴力対策基本計画進行管理の評価基準について

(3) その他

2 提出資料

資料1 進行管理調書作成時の評価方法の変更について

3 審議経過

=開会=

事務局/前川：ただ今から平成30年度第2回芦屋市男女共同参画推進審議会を開催いたします。

=事務局あいさつ= 森田部長

事務局/前川：本会議は、芦屋市情報公開条例第19条により原則公開となっております。個人情報等の非公開事項を取り扱う場合は、非公開についてお諮りいたします。本審議会は市の附属機関であるため、会議録の要旨を公開しております。会議録の作成のため、録音をさせていただきますので、ご了解ください。会議録の公表につきましては、ご発言者のお名前も公表いたします。

この審議会のほかに、市組織として男女共同参画施策を総合的に推進するため「男女共同参画推進本部」が設置されております。市長を本部長とし、施策の推

進を図っていくものです。

本日現在のところ、傍聴のご希望はございません。

それでは、会議開催にあたりまして、柳屋会長からごあいさつをお願いします。

柳屋会長：みなさまおはようございます。会議に先立ちまして、本日も私から最近気になったこととお話させて頂きたいと思います。少し前の2015年に「どうして女子学生は理系の学部に進まないのか」という調査が行われ、先日その調査をされた方のお話をお聞きすることがありました。男女問わず文系か理系の進路を決める時期として非常に多いのは、中学生の時だそうです。「進路を理系にするか文系にするか決める際に、影響のあった人は誰ですか」ということも同時に調査されており、女子学生の場合、進路指導の先生という回答と並んで、母親という回答も多かったそうです。また、母親からアドバイスされ、文系に進んだという回答をした女子学生が多いという結果が出ているそうです。私もこの結果に納得できる場所があり、芦屋市において、男女の性別役割分担意識の解消のためにより啓発を進めていかななくてはならないところですが、そういった傾向も含め考えた啓発というものを今後は行っていく必要があるのかなと思っております。

<議 事>

柳屋会長：議事次第に沿って進めたいと思います、事務局からご説明下さい。

●事務局より資料「進行管理調書作成時の評価方法の変更について」説明

柳屋会長：これまでは高水準で目標達成しているにも関わらず適切な評価ができていないという状況があったようなので、これに対応するために、新しい評価方法に変更してはどうかというご提案ですが、みなさまいかがでしょうか。

事務局／福島：本日欠席の中山委員から、事前にいただいたご意見を紹介いたします。まず、評価方法の変更賛成とのこと。更に3点ご意見いただいております。1点目は資料の【変更点】4つ目の「最終的に目標未達成であっても、」の後に「例えば」を追記した方が読みやすいのではないかと。2点目は2つの計画において各課が実施もしくは実施予定とする事業が多すぎること。3点目はC評価で事業を途中でやめる場合に記載できるようにしてほしい、以上のご意見をいただきました。次の第5次ウィザス・プランや第3次DV対策基本計画策定時までにはこのような課題を取り出し、検討すべきと考えます。

村上委員：3点目について、C評価の事業を途中でやめる場合、進行管理調書に次年度以降やめる旨を明記するというのでしょうか。また、これまでは特に明記されることがないまま、次の計画では消されていたということですか。

事務局／福島：これまではやめるという選択肢がない状況で一年ごとに実績を評価していましたが、今度は5年間の途中で2年目にやめた方が良いと判断でき

る事業あれば、C評価をつけた上で、次年度からやめる旨を入れることができるようにしてほしいというご意見でした。

村上委員：その判断はどこが行うのでしょうか。

事務局／福島：所管課と所管部長です。

柳屋会長：審議会には、取りやめたいという提案であがってくるのか、もしくはやめたという報告が上がってくるということなのかどちらでしょうか。

事務局／福島：一番多いパターンは次年度からやめます、という形かと思います。

柳屋会長：所管課の判断に対して、審議会の方からこういう対応をすれば事業実施を継続していけるのではないか、こういう意味があるのではないかといった意見をすることは可能なのでしょうか。

事務局／福島：所管課へお伝えすることはいたします。

宮本委員：前進しているA評価とB評価については特に良いと思いますが、C評価になったものについては、なぜ進まなかったのかという理由が重要だと思います。一度は目標として掲げた訳なので、出来ないからやめるではなく、なぜできなかったか考える必要があります。実施に意味がない、今の時代にそぐわない、そういった検討をきちんと行うべきかと思います。

事務局／前川：C評価には他の事業と重複する等で課として不要のもの、課題があってできなかったものという二つのパターンがあると考えます。以前から審議会でもご意見を頂いていましたが、事業の数が多すぎるので精査が必要です。対象は重複や時代に合っていない等が判断できるものになるので、課題がある事業を途中で投げ出すということにはならないと思っています。

事務局／福島：やめる時は理由等の説明を記載してもらう予定で考えております。

柳屋会長：やめる理由を記載して、C評価となった意味合いも理解できるような記載をしていただくということですね。審議会でもC評価になっている理由の説明を行うことは継続していただきたいと思います。

高田委員：事業実施目標を見ると、できたかできていないかというものが多いようですが、私が考える目標はもっと大きな視点で、例えば「住民の方が男女共同参画について理解を深める」といったように、目標は「住民の方」主体が基本だと思います。しかし、この計画は違っていて、事業を実施したかどうか重点があり、それは致し方ないと思います。なので、目標の立て方についても今後検討する必要があると思います。なお、変更後の評価基準に対しては概ね

賛成です。ただ、このA、B、Cには二つの評価基準が混在していて、一つは目標を達成したかどうか、もう一つは進捗したかというこの二つの軸で評価されているように思います。そうすると、Aは目標達成し、かつ進捗もした。Bは目標を達成していないが、進捗があった。Cは目標を達成しておらず、かつ進捗もなかった。このように明確に書いたほうが分かりやすいと思います。二つの軸で評価するということだと思うので、例えば研修を2回実施すると目標を立てたが、1回しか実施できなかったという場合は、目標は達成していないが進捗したということになるので、B評価になると思います。しかし、例えばパンフレットを配架したかどうかは、実施したかしていないしかなく、A評価またはC評価のみということになります。目標によって違うところがあるので、明確に書いた方がいいのではないかと感じました。

柳屋会長：高田委員のご意見の前半部分についてですが、目標の立て方が重要であり、大きな目標も考えなくてはいけない。この5年間の共通目標はそういう意味合いで考えて、各年度で具体的に実施するという理解でよろしいでしょうか。

事務局／福島：計画の体系を基に、基本目標の中で具体的に何をするのかわかりやすいように、各課が行っているもしくは行う予定の事業実施目標を記載しています。そのため、Aは目標を達成したもの、Bは目標に対して進捗があったもの、と記載していますが、二つの評価軸をもう少し明確にできるか検討したいと思います。

柳屋会長：それは具体的なA、B、Cの評価基準の書き方の問題だと思うのですが、先ほどの質問は大きな目標をどうするのかということだと思います。DV対策基本計画の進行管理調書の中だと、5年間の共通目標はどれになるのでしょうか。「内容」というところが5年間の目標になるのでしょうか。

事務局／福島：事業実施目標が5年間の目標です。

事務局／森田：目標の大小は計画の大小と関連しております。今お諮りしている進行管理は単年度ごとの実施計画を基に、5年間の目標を見据え、評価することになっているのですが、第4次ウィザス・プランでは5年スパンの数値目標をあげています。これがいわば大きな目標ということになってまいります。これは5年スパンの計画自体の5年後の評価になりますので、それはそこで検証することになりますし、さらにもっと大きなことで申し上げますと、市全体のマスタープランとしての総合計画がございますので、その中にさらに大きな目標値、例えば市民の意識がどう変わってきているか等の項目があります。それは市民意識調査等をもとに、目標や指標を掲げ検証することになっており、計画が重層的になっているため、目標もそれぞれの計画のレベルに応じたものになっているということが基本にございます。

柳屋会長：数値目標のない項目はどうするのかという問題はあと思うのですが。

事務局：森田：必ずしも数値目標とは限りません。

柳屋会長：はい、それを5年間の共通目標として事業実施目標を設定しますと、これまでのことかということなのか、それとも新しく5年間の共通目標を実施目標として設定し直すということなのか、どちらなのでしょう。

事務局：森田：今回の新たな見直しということで考えています。

柳屋会長：つまりイメージとしては、DV対策基本計画の進行管理調書の中でいうと、事業実施目標が5年間の目標であるということですか。

事務局／福島：はい。ただし、全体的な目標は基本目標1～4になります。

柳屋会長：それについては了解しています。資料の【変更点】に「5年間の共通目標として事業実施目標を設定」とありますが、これは既にやってきたことについてか、新たに5年間の目標として設定し直しましょうという意味合いなのか、どちらでしょうか。

事務局／森田：それはレベルではなく、単に期間の問題です。実施計画というのはいくまで基本計画であり、ウィザス・プランという上位計画の中で目標を達成するための、単年度ごとの具体的にどういう事業をやるかという、それぞれの事業における目標を設定しているということです。

柳屋会長：了解しました。もう少し上位的な目標設定になる可能性があるということでしょうか。

事務局／森田：それがレベルではなく、単に期間の問題です。

柳屋会長：30年度で書かれている事業実施目標がそのまま引き継がれる可能性もあるということですか。

事務局／森田：はい。

柳屋会長：内容が変わる場合もあるということですね。

事務局／福島：各課の取り組み状況をみますと、ほとんどが5年間という長い期間で進めております。そのため今回、事業実施目標を5年間同じ目標で評価していくこととしました。

村上委員：変更後の評価基準は分かりやすいと思ったのですが、5年スパンで数

値目標等を設定していると、1年毎の達成の度合いとして見ると、目標設定の次年度の評価はすごく悪くなってしまうよね。

事務局／森田：目標にもよると思います。積み上げ型の数値目標であれば、一度達成すればその時点で達成ということになりますし、そもそも掲げている目標自体が数値目標だけではありませんので、事業の実施がある年はできて、次の年はできないかもしれないので、5年スパンと言いながら目標の立て方によって、評価結果が変わってくるものだと考えます。

柳屋会長：5年スパンの目標のもとで、各年度の目標を考えるという意味合いですか。

村上委員：評価基準が変わるので、A評価が減ってC評価が多くなるかもしれない、だから単純比較はできないということですよね。計画の内容によるとも思いますが、少なくとも数値目標の部分は、評価が下がるかもしれないということですよね。

寺田委員：高田委員の発言はこの評価基準の中に進捗状況として進んでいるかいないかという基準と、目標に対して歩みを進めているのか、スタートを切れていないのかどうか、という二つの基準がこの文言の中にあるというご指摘であったと私は理解しています。変更後のB評価を「目標を達成はできていないが、進捗があった」といった文言にすることによって、BとCが明確に切り分けられるのではないかと思います。そもそも数値目標にしても、そうでないものにしても、取り組んでいるかいないかはBでもCでも判断できてしまいますので、取り組んでいるのであれば、少なくともB以上の評価がつくと思います。目標を立てることはしているが、一切取組をできなかった場合のみC評価になるという解釈をすると、Bの文言のところが曖昧な表現になってしまうので、少し文言を加えるなり、基準としてこういうことである、という説明があれば良いのではないのでしょうか。

高田委員：変更後の基準自体それはそれで良いと思っているのですが、この事業実施目標を見ると、できたかできていないか、例えば配架したかしていないかという目標のかけ方と、もう少し大きく推進をはかるという目標もある。そうすると、いわゆる「レベル」が違うという話になるので、すごく評価しづらいと思います。なので、目標をもう少し見直した方が良いのではないか、という意見を言ったつもりでした。評価をする意義は、翌年以降にどうするかと検討するために行うのであって、評価することがゴールではないので、目標のレベルを統一した方が良いのではないかと思います。行動目標のような、したかしていないかというものと、進捗があったかどうかというものが、混在しているように思います。

事務局／森田：ご指摘のとおり、目標設定に整理が必要かと思います。本来計画

というのは上位計画の目標を達成するために下位の計画があり、段階がどんどん下がり落とし込んでいき、詰まるところ最後に実施したかしていないかというところに下りてくるのが本来だと思います。ただ、男女共同参画推進課で実施している事業については、実施計画レベルでも、数値目標を掲げるような割と高度な目標になっている部分があるのではないかと考えています。他課で実施している事業については、経常的な業務も含めて非常に実務レベルの内容が並んでいますので、そこは計画の中身自体の段階が合っていないと我々も認識しております。計画のレベルを合わせることは、評価を揃えるうえでも、今後の課題として検討が必要と考えております。

高田委員：実施したかしていないかというのは、計画評価でなくて業務評価だと思うので、やはりその違いを明確にした方が良いかなと思います。

事務局／森田：本来、実施計画というのはその段階の話であって、要するに個々の事業のこういうことを実際やりますというものなので、下位計画になればなるほど、実施したかしていないかという評価にならざるを得ないのかなという気がしています。ですが、レベルが混在しているために分かりにくくなっているという現状がございますので、その点は今後段階的にでも解消していきたいと考えています。

奥田委員：5年間の全体の事業計画があって、年度末にそれぞれの課が評価しているというのは、確かにどこもそうだと思うのですが、それらに客観的な評価基準を設定するのは難しいことだと思います。数値であってもギャップ感があり、達成したからその全体目標が達成されているか、というところでもないことや逆の場合もあり得ます。その辺りを既に工夫されていると思いますが、目指す本質を捉えたような補足の文言等を付加することで、より読んだ人が分かり易くしてほしいと感じます。質問が2点あり、まず1点目が、資料の【変更点】の二つ目に「前年度の評価「A」の水準で実施した事業は、今年度も評価「B」でなく「A」とする。」と記載してありますが、次年度の計画を立てるときに、前年度の目標をそのまま持ってくれば良いという話になってしまうと思うのですが、どうでしょうか。もう1点は「最終的に未達成であっても、他市より高い水準の事業は進捗があれば評価「B」とする」ということですが、なかなか難しいのではないかと感じるのですが、常に何らかの基準を持って判断されているのかということをお尋ねしたいと思います。

事務局／福島：まず1点目について、変更前は「A」の水準で継続して翌年も取り組んでいれば評価が「B」になり、継続して努力していても報われない評価になっていたため、このように変更いたしました。

奥田委員：常に非常に高い目標を維持されていたと判断するということですね。

事務局／福島：はい。

奥田委員：そのため、その「A」に値する前年度の事業内容であれば、それを継続することはとても大事だということですよ。それをそのまま次年度の計画の中での目標にするということではダメなのではないでしょうか。

事務局／福島：これまで単年度の実施計画だったのですが、ほとんどの課が次の年度も同じ目標を設定している状況でした。理由としては、大きな目標に向かって毎年同じ事業を工夫しながら取り組んでいるからだと思います。そのため単年度の目標もほとんど5年分の目標と変わらないので、実態に合わせて変更するに至りました。2点目ですが、最初に立てた目標に対し、例えばあと1割くらいで達成というところまで来ていても、あくまで未達成であれば「C」評価だということではなくて、他市と比べてよくやっているということであれば「B」と評価してもよい、と考えたものです。

村上委員：他市というのは具体的にどこでしょうか。

事務局／福島：「他市より高い水準の事業は」の部分が不要かもしれません。

柳屋会長：【変更後】の評価基準の考え方に従えば、進捗があれば「B」評価になりますよね。

村上委員：阪神7市1町と比べるにしても、例えば宝塚市は、かなり男女共同参画の意識が高い市かと思います。そういった意識の高い市と比較すると水準としては低くなる可能性があるかと思います。さらにその市の実績は各年度によって変化するので、やはりこの「他市より高い水準」という表現は曖昧すぎるかなと思います。

事務局／森田：全ての目標について他市と比較がそもそも可能かどうかということにも関わってきますので、この部分は削除した方が良くないかなと思います。

柳屋会長：検討して頂くようお願いいたします。

事務局／森田：要するに進捗があったかどうかというところで判断するほかない、ということですね。

奥田委員：客観的な基準はないのでしょうか。

事務局／森田：本市独自の事業というものもございますので、その場合は比較の対象がないということになります。その部分は削除して、目標は未達成であっても前年に比べて進捗があれば評価するとお考え頂ければと思います。

中里副会長：最終的に達成されたら終わりという経常的な目標と、積み上げ型の

目標の両方をどちらも5年スパンで目標設定し、毎年評価することが非常に難しいと思います。その意味では例えば毎年3回講演を実施しますという経常的なものであれば、その年3回実施できたら「A」で、その次の年は1回も実施できなければ「B」か「C」になるという変動がある、戻ることになる訳ですね。5年間でこれを成し遂げますという積み上げ型のものであれば、一度「A」になれば落ちることはないはずで、何かを立ち上げるとか、設置するといった達成ができれば、変わらないはずですよ。経常的なものと積み上げ型のものの二つに明確に分けることが可能かは分かりませんが、毎年実施するものについては、例えば実施頻度が下がった場合等、事業を実施できなかった場合には評価が下がりうるだとか、少し分けて何らかの説明を書いた方が、評価もしやすいと思います。5年の目標に対して毎年評価することについて、その評価の種類が最終目標にどんどん近づいていくタイプのものと、毎年アップダウンするもので評価の仕方が違う気がします。本来は、5年の達成目標に対する進捗の評価と、毎年の実施の評価が別々にあると分かりやすいと思うのですが、おそらくそれは評価の負担が大きくなってしまうという理由から、シンプルな評価の体系にされたと思うので、違うタイプの目標を毎年一年経過した段階で、どの観点で評価するかということが混在している気がするのですが、それが【変更点】の説明になるのかもしれないのですが、そのあたりが区別できるように説明いただいた方が、今の皆さんの質問に対する回答になるかと思いますがいかがでしょうか。

柳屋会長：変更後の評価基準はこれで良いかなと思いますが、今の提案を含めて中身のところを少しご検討頂いたらどうでしょうか。「A」にしても「B」にしても、いくつか意味合いの違うものが含まれてくるので、基準だけをぱっと載せるということだけでなく、その下に説明文か何かがあった方が良いと思います。「A」にはこのようなものが含まれています、と書いてある方が理解しやすいかと思います。本来であればA1、A2とかB1、B2とした方がより分かりやすいかもしれませんが。

中里副会長：【変更点】の下から二番目の「最終的に」というのも、これが毎年評価するので、そういう意味では「最終的に」というのは一年経過した段階では分からないので、これ自体が一年毎の評価の説明として、何をどう評価していいのかわからなくなるのではないのでしょうか。

事務局／福島：検討いたします。

高田委員：もう一度お聞きしますが、この「事業実施目標」というのは、5年間基本的には変わらないということですね。

柳屋会長：はい。

高田委員：つまり、これはもう達成したから違うことに変更した方がいいいのでは

ないかというのは、「A」評価がずっと続くなり、「C」評価が続くなりして、途中の年度で変更することも可能だと考えてもいいでしょうか。

事務局／福島：はい。

高田委員：それなら良いですね。例えばリーダー育成のための講座を年1回以上実施するという目標を、やはりこれは必要だから2回実施だとか、そういう柔軟な対応だということが理解できたら良いなと思います。

事務局／森田：本来実施計画というのは単年度計画でございますので、単年度ごとに見直すというのが基本です。ですので、目標は今回上位計画に合わせて5年後の計画周期に合わせて、目標のゴールを合わせるということですが、中身を単年度ごとに目標も含めて見直すことについては、その通りだと思います。

柳屋会長：5年後の数値目標は定められていますが、それは5年間のうちに頑張らましようという理解をすると、5年の共通目標が数値目標以外で定められたときには、それをそのまま5年間維持しようという発想になるのかなと思います。ですが、数値であるかどうかは別として、かなり大きな目標、5年間の共通目標の場合には、定めるという発想になるのかなと思ったりしますが、その他何かご意見ありますでしょうか。少なくとも芦屋市は大いに頑張っておられて、これまで「A」評価が非常に多いという状況でしたので、これが減るというのは少しいかなものかなという感じもしますが、そのあたりもまた工夫してご検討頂ければと思います。

事務局／森田：当分試行錯誤が続くと思いますが、今後ともご意見のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

柳屋会長：そうですね。それでは、議題については以上ということにさせていただきます。この審議会を退任される方もおられますが、来年度の第1回の審議会は7月か8月頃になるとのことです。それではこれで終了させていただきます。ありがとうございました。